

研究 研修 部 だ よ り

近盲研 重複障害教育研究会

発達段階に応じた教具と 盲児・盲重複児の指導のポイント

7月31日(水)に近畿盲学校教育研究会 重点部会 重複障害教育研究会がハイブリッド開催されました。以下、出席した柿本先生からの報告です。

研修内容

- 1 物との関係による幼児期の認知発達段階について
- 2 盲児の手の使い方と概念形成を育む指導(事例紹介)

○幼児期の学び方として、見える子、見えない子同様に、「自分でモノを操作する経験から大小、長短、空間などの概念形成」が発達していく。

○基本的には、発達の順序性は定型発達と変わらない。

○全体的な発達(単一障害の事例)として、6歳前後で発達が追いついてくると考えられる。

○活動期ごとのポイント(資料に明記していないこと)

・感覚運動活動期:やりとり遊びをしている間に教材を提示(紹介)し、できるだけ机で取り組むことができるようにもっていく。

・はめこみ構成活動期:形の弁別や10までの数概念が理解できるようになった子に取り組んで欲しい活動。弁別活動期を越えたらすぐに点字指導に入るのではなく取り組んで欲しい活動

○手の使い方は、学習の積み重ねによるもので、活動ですること、手が使えるようになっていく。

○認知発達が 7 歳以前であれば、発達段階に応じた学習課題を設定し、じっくり積み上げていく(但し、発達の伸びは中・高で打ち止めになる傾向)。

みはま支援学校実践交流会

障害の重い子どもの 授業づくりについて

8月20日(火)に、みはま支援学校実践交流会が行われました。本校よりオンライン参加した先生からの報告です。

研修内容

- 1 授業づくりで今もとめられていること
- 2 授業づくりの留意点・ポイント
- 3 授業づくりのコツ
- 4 絵本を教材として使用する授業の留意点・条件・ポイント

○卒業後の姿だけでなく、今後の人生を考えて、人生の履歴を作っていく意識。

○障害の重いこどもの変容はゆっくりである。力を蓄えてある時に発揮する。ぶれないために、あきらめずに取組を継続。そのためには、チームワーク、連携、引き継ぎが大事。

○楽しい雰囲気を作ろうと、子どもが気づき、表出する前に、教師が先取りをして話したり、喜んだりの授業が多い。

→余計なことを言わないようにシナリオを作って授業をしているところも多くある。

○よりよい授業にしていけるためには、教師自身も変わる柔軟性が必要。柔軟性があれば授業は変わっていく。

○どのように感じるのかは実際わからないので、どんな重度の子どもでも、課題を挙げてわからないのではないのか、できないのではないのかと言って、やらないのではなく、“同じ感覚を感じて欲しい、体験して欲しい”という思いをもち授業を考える。

○言語感覚を豊かにするために、キーワードとなる言葉を意識した授業→オノマトペを感覚的に使っているが、教員間で統一して使う等